

2011 研修結果報告

樋口 由佳⁽¹⁾

—今年度の取り組み（イタリア遠征）—

今年度は、7・8月の6週間イタリアで行われる\$10,000、\$25,000の大会にエントリーした。世界のトップクラスの選手を数多く輩出するヨーロッパのテニスがどのようなものかを肌で感じてきた。そこには様々な違いや発見があった。コートサーフェスやプレースタイル、大会の進め方や雰囲気は今までにあまり経験したことのないものばかりであった。結果は以下の通り、シングルスではなかなか勝ち進むことは出来なかったが、ダブルスで優勝と準優勝をそれぞれ二度手にすることが出来た。

	シングル	ダブルス
Torino (1)	1回戦	準優勝
Imola (25)	予戦決勝	ベスト8
Viserva (1)	ベスト16	準優勝
Gardone (1)	1回戦	優勝
Monteroni (25)	予選決勝	ベスト8
Locri (1)	ベスト8	優勝

※(1) …\$10,000大会

(25) …\$25,000大会

—日本とイタリアの違い—

1. 試合時間と観客

日本で開催される同レベルの大会では、準決勝、決勝を除くと大抵9時か10時から

試合がスタートすることが多い。しかしイタリアでは初戦であっても11時頃に試合がスタートし、2回戦になると12時や14時スタートになるなど、昼から開始されることが多かった。また、少ないコート面数で行われる為、14時スタートの6試合目などになると試合が始まる頃にはもう夜である。実際に6週目の大会のダブルスの決勝戦では、試合開始時点で23時をまわっており、終了した頃には日付が変わっていた。普段、午前中に試合をしている私たちにとってこの時間帯に合わせて行動することは難しく、試合前の練習の量や時間、試合までの過ごし方や食事のタイミングなどに苦労した。ナイトマッチでは睡魔との戦いでもあった。しかし、このナイトマッチでは観客の数が日本とは全く違う。日本ではレベルの高い大会になれば観客も多くなるが、このような1万ドルや2万5000ドルレベルの大会では選手の身内や知り合いと少しの観客が来るだけであまり観客が入っているとは言えない。イタリアでは身内や知り合いはもちろんだが、大会が開催される会場の近くに住んでいる人がわざわざ足を運んで見に来てくれる。しかも昼間ではなく夜になるに

(1) スポーツ開発・支援センター研修員

つれて徐々に人が集まり会場がにぎやかになってくる。特定の選手を応援している人もいたが、ただ純粹にテニスの試合を楽しんでいる人が多くいるように感じた。選手のナイスショットには敵味方関係なく拍手をし、ブラボー！という歓声があがることもある。この環境の中でプレーすると、自然と自分自身のテンションやモチベーションが上がり、良いプレーが出来ていたように思う。

イタリアのテニスクラブは日本とは違い、いくら小さいクラブであっても食事をする事が出来るレストランがついている。観客は試合の合間にご飯を食べたりワインを飲んだりとにぎやかにしており、テニスだけでなくこれらを含めて大会を楽しんでいるように見えた。



↑ 6週目の決勝戦後
(24時をまわっているにも関わらず小さい子供がたくさんいる)

2. クレーコートとプレースタイル

日本の大会ではオムニコートという砂入

り人工芝での試合が多いが、イタリアはクレーコートといわれる赤土のコートでの試合が多かった。クレーコートは、バウンドがとても高くなる。しっかり後ろに下がらないと力の入らない高い打点で打たされてしまい自分の打球が甘くなってしまう。またボールが跳ねる分カバーリングする時間ができ、普段ポイントにつながっているようなボールも返球され簡単にはポイントをとることが出来ない。そこで重要なのが技術や戦術である。ヨーロッパの選手はスピンやスライス、ロブやドロップショットなど様々なショットを多用してくる。そうしないとポイントを取ることが出来ないからだろうが、技術が未熟な選手であっても試合中にトライしようとしていることがよく分かった。当初私が考えていたことは、相手がセンターに戻る時間をなくすために普段よりタイミングを早めてボールを打ち、左右に振ることである。しかしこれではポイントを取ることがとても難しかった。やはり左右だけでなく前後に相手を動かすことと、あの広いコートをいかに広く使うことが出来るかを考えることが必要だった。



↑ クレーコート

3. 反省と展望

遠征当初、普段のプレーだけではなかなかポイントが取れないことで、無理にコースを狙いすぎて自滅することや、焦って出るべきではない場面で前に出てしまってミスするということが多かった。まんまと相手の作戦にはまっていた。やはりこのコートでは、様々なショットを使って相手を動かしたりタイミングを変えることが必要だと感じた。その為にはショット一つ一つの技術力と、どのようなプレーをするかという発想力を持たなければならないと感じた。私は相手にドロップショットを打たれることが多かった。これは自分のボールに威力がなかったり浅かったりすることが原因であると考えるので、ベースになるニュートラルなストロークの質をもっと上げなければならない。深さと安定性のあるボールを打つには、手だけではなくもっと体幹を使って身体全体で打たなければいけないと感じた。

そしてこの遠征で一番強く思ったことがある。それは攻撃するべきボールと守るべきボールをしっかり判断して、甘くなったボールを逃さないことである。逃さずに攻撃し、それをいかにポイントにつなげることが出来るかである。とにかく甘くなったボールを逃さないことが一番であると考え。訪れることの少ないチャンスボールを逃しては勝ちにつながらない。来年度はプレーの幅を広げるとともにそのプレーをいつどのように使うかという発想力を豊かにすること、これらを意識して取り組ん

でいきたい。

